

平成12年度 最上川水系流域委員会村山地区小委員会
(第3回)の議事概要

1. 開催日時

平成12年11月17日(金) 10:00~12:00

2. 場 所

山形県建設会館 5階 中会議室

3. 出席者(11名)

委 員:前川座長、奥山委員、小山委員、高橋委員、村形委員、横山委員、吉野委員

地 建:山形工事事務所長、最上川ダム統合管理事務所長、新庄工事事務所調査課長

山形県:山形建設事務所長

4. 議 題

- (1)最上川水系流域委員会の報告
- (2)最上川の地域に対する役割・流域住民との関わりについて
- (3)その他

5. 記者発表等

平成12年11月9日(木)山形県庁記者クラブ(16社)、専門紙(4社)に
小委員会開催 投げ込み

平成12年11月17日(金)小委員会取材 山形放送(YBC)

6. 審議結果

(1)流域委員会の報告

「河川整備計画の目標と基本的な考え方」の説明と、最上川水系流域委員会及び地区別小委員会の経過

○同資料を事前に送付され、それについて意見を書いたがその意見はどのように反映されるのか。それぞれの分野の意見を知ることは勉強になる。

A:御意見については十分に反映し、回答については整理したいと考えております。

○整備計画の資料は一般の人が読んで分かりやすくしてもらいたい。文章が長いとよく分からない。

(2) 最上川の地域に対する役割・流域住民との関わりについて

自然、歴史、風土、文化を踏まえ、村山地区における最上川の特徴について意見交換を行った。

- 先祖も現在の我々も最上川がいかなる役割を持っていたのか、形の上でも精神的にも最上川に対する一体感を持っているのかが大事である。
- 最上川は物流の面で見ても山形県の玄関であり、背後には様々な文化がある。表面的には出てこないことでも、基盤が最上川にあるという具体例や説明があれば、県民は一体感を持ちやすくなるはず。最上川が生活の拠り所だという面はたくさんあり、それが及ぼす影響は大きい。
- 最上川を環境を保護しないと、県民が一体となって親しむ心がわからない。国・県民挙げてどのようにしたらきれいになるかということを一層早く考えなければならない。
- 最上川の自然と言っても、場所によって違いがある。地域による自然の特徴をとらえた川づくりが大切。景観や表面だけ自然というのではなく、鳥等が繁殖できる本当の意味での豊かな川を望む。また、文化を守りつつ育つような地域のための川づくりや、地域住民の要望・自然を生かすため、きめ細かな調査をしなければならない。
- 最上川シンボルライン構想、アルカディア構想、本委員会と、国や県で実施している委員会があるが、取材する側として少々混乱している。省庁の縦割り行政ということがあるが、三方の目指す方向が見えにくい。県民に部分部分で伝わったとしても双方の方向性が分かりにくく、混乱するのではないかと感じる。お互い情報を入れつつ、何を指すかを明確に考えないといけない。河川行政というのは漠然としており、何から手をつけて良いか分からない部分もあるので、水質保全1点にこだわり目標を明確にしてはどうか。水質だけにこだわったとしても、これから目指す河川行政の目的にそれることは無いと思う。

A: 国と県で委員会を実施しておりますが、いずれも目指すところは安全で安心して豊かに、誇りを持って暮らせる国土・県土づくりということで、似通っているところはあります。この河川整備計画は、従来ハードの整備ばかりが目立つような計画だったものを、より幅広く国民の皆さんの意見を取り入れて、計画を作っていくということと、視点においても治水・利水・環境という社会に求められる要素を加味した上で河川整備を進めていくものです。河川整備計画には、どこでどのように河川管理施設の整備をするかを盛り込んでいくこととなりますが、その場合作ることだけが目的とならないよう、作ることでどういう社会やそれに対する効果を目指すか、また作る前の前段の議論としてどういうことに留意してやっていくべきなのかを位置づけていくものです。県と国とでお互いヒントになることについては情報交換していきます。あらゆる行政の取り組みは、情報交換を一層密にしながらやっていく必要があると考えています。
- 洪水の防止策が収まってくると次は河川利用ということで、最近では様々な事業が考えら

れている。その中には、思い込みで行っている事業もたくさんある。もともと自然にはなかったものを植えること(例:桜)で周辺の他の樹木に被害が生じることもあるので、長い目でよく考えた上で実施しているのかが心配である。

- 住民が環境問題について本気で関わるためには、アトリエ、観察小屋、船着場、スポーツ施設など、常に誰かが川を見ているようにし、何か問題が生じたときには、すぐその原因を取り除くよう運動をおこす。大きな洪水対策は国や県に任せるとしても、「自分達の生活に関するところは自分達の手で」というキャンペーンが今後必要である。
- 資料にある最上川を「孤独な川」とする表現について、なるほどと思う。最近の最上川は帰化植物が多く、昔の川のイメージはない。河川敷の公園を見ても最初の頃は利用されていたのに、日にちが経つにつれて人々は離れてしまっている。そういう川づくりではなく、体験と参加型の川・施設づくりをしなければならない。具体的な場所として、①須川と最上川の合流点②古最上と本川が関係する箇所③村山～大石田までの狭窄部④中山町や大石田、その4つの地点が自然の特徴がある良い箇所である。そこを体験と参加型の川づくりをしていけば、孤独な川から生活型の川に大きく転換できるのではないか。だが、かなりの時間を必要とするため、「水質と自然の保全」などテーマを1点にしぼるのが良い。また、本当の自然になるためには何年もかかるので、帰化植物からで良いから少しずつ自然を見せることが大切である。
- 最上川を「孤独な川」とする表現について、住民を安心させようと立派な堤防を作ること、住民に水害について何の対策もさせなくなったことが、最上川を孤独にしたという気がする。むしろ思いきって最上川をドラ息子とまでは言わないまでも、親がいくら言っても聞かない年頃の息子のような存在として扱うことも必要かと思う。
- 最上川ビューポイントについて。各行政区ごとに平均的に出しているところがあり、本当は美しいかどうかよく分からない。行政的に考えてではなくて自然に美しいところが多い地区もある(村山地区)。精神的・文化的拠り所となる箇所は、何にこだわることなく自然と出てくるもの。山形だからというのではなく東北、全国にも誇れる場所なのが最上川である。美しい自然・景観無くして精神的な安らぎは生まれない。水質だけにこだわることも大事ではあるが、シンボリックな重点としてまとめていくことも大切だと思う。